# ２１世紀の日本のかたち（５４）

## ―東北からの国づくり
## ・東北州構想へ（２）―

戸沼幸市
＜(一財)日本開発構想研究所 代表理事＞

### １．東北六魂祭

東北の夏は各地で熱い祭りが大地一杯に繰り広げられ響き合います。

3.11東日本大震災の犠牲者への鎮魂と災害からの復興を願って、昨年（平成23年）７月、宮城県仙台市で"東北六魂祭"（第１回）が行われ、２日間で36万人が来場したとのことです。東北の代表的な夏祭りを一堂に集めた、東北の底力を示そうとの試みでした。

第２回は本年５月、岩手県盛岡市で行われ、青森ねぶた祭、盛岡さんさ踊り、仙台七夕まつり、秋田竿燈まつり、山形花笠まつり、福島わらじ祭りが一堂に会して盛大に行われました。主催者発表によると、盛岡への来場者は20万人を越え、予想以上の盛況であったとのことです。

東北六魂祭の企画は震災直後、青森市長と仙台市長が「ねぶた祭」と「七夕祭」を共同で開催したいとの提案が膨らんだものです。東北六魂祭は、共催６市の話し合いで決められることになっており、来年の第３回は福島市で行われる見通しだと先日、青森市長と福島市長が話してくれました。

東北は震災以前から県境を越えた広域観光ネットワーク構想の動きがあり、その一つとして、東北新幹線の新青森開通を機に、県境を越えた祭り、東北夏祭りネットワークが出来ておりました。これがベースになって今度の企画が生まれたとのことですが、東北六魂祭は、東北の底力を示し、東北（州）への盛り上げの前奏曲とすら感じさせます。

旧暦７月７日を前後して８月上旬、東北は祭一色になります。東北６県で行われる夏祭りは今年は同時多発的東北六魂祭に見立てることができましょう。

「青森ねぶた祭」（８月２～７日）は七夕の灯籠流しが起源ともいわれていますが、死者、先祖への鎮魂に重ね、勇壮絢爛たるものです。灯りを内に抱えた武者の立体ねぶた絵を載せた20台もの山車を引いて、大太鼓に合わせて、ラッセラー、ラッセラー、ラッセ、ラッセ、ラッセラーと、大勢の男女、跳人（はねと）が情熱的に踊り進む大通の大行列はまことに壮観です。一夏300万人もの人が集まる北の地に生まれた青森ねぶたの発信力は強く、時に海外にも出前するほどです。

「秋田竿燈まつり」（８月３～６日）は、無数の提灯で秋田の夜空と街を幻想的に照らし出します。一基、数本の横竿に46の提灯を付けた、12m、重さ50kg の竿灯、"大若"を印半纏に鉢巻姿の力自慢の凛々しい若者が手のひら、腰、肩、額に載せて調子をとりながら、

街の中を「オオウェッタ」「ドコイショ」と掛け声をかけて歩きます。これに少しずつ小ぶりな“中若”、“小若”、“幼若(子供用)”がつづき、夜の秋田は壮観です。提灯は米俵、竿燈は稲穂を表現して五穀豊穣を祈り、合わせて盆の精霊を迎えます。

岩手県には「盛岡のチャグチャグ馬コ」の大行進（例年６月第２土曜日）はユニークな祭りがあります。岩手はもともと良馬の生産地であり、農作業に欠かせない馬に感謝し、無病息災を祈る祭りです。着飾った馬コ100頭が鈴をつけ、チャグチャグと良い音を響かせながら、滝沢村の蒼前神社から盛岡八幡宮までの15キロの道を４時間かけて行進する様は､岩手ならではの独得な味わいがあります。

東北六魂祭の岩手の出し物は盛岡さんさ踊りでしたが、通年（８月１～４日）は１万余の太鼓のリズムに合わせ、２万人近い踊り手の行進は壮観です。

「山形花笠まつり」（８月５～７日）は、山形の特産、紅花の造花を付けた花笠を手に華やかな衣装に身を包んだ踊り手数千人の市中大パレードです。「ヤショ、マカショ」と囃しながらの大行進は躍動感あふれる現代的リズムに乗って進みます。その基底には酒田船方節のリズムに通じるものがあるという説もあります。また、山形花笠おどりが今のかたちになったのは昭和40年頃で、いくつもの地域の多様なおどりが不連続に連続しているとのことです。地域の歴史が祭りには凝縮されているということなのでしょう。

「仙台の七夕まつり」（８月６～８日）は仙台駅や商店街などの市内中心部大通りに豪華絢爛な竹飾りが立ち並びます。市内全域も笹飾りで一杯です。死者を弔い、笹竹に短冊に願いを書いて夜空の星に祈る七夕は日本中にありますが、仙台の七夕まつりはスケールにおいて群を抜いています。

天明の大飢饉（天明３（1783）年）で荒廃した地域の立て直しのために、仙台藩主伊達政宗が藩内各地で行わせたのが起源とされております。現在、東北三大祭りに数えられるまでになったのは戦後であり、動く七夕パレード、花火大会、夕涼コンサートとにぎやかな仙台七夕祭りは200万人の観光客を集めます。

福島県では、「相馬野馬追」（７月下旬）が有名な祭りです。甲冑に身を固めた武者たちが馬に乗り、法螺貝を吹き鳴らし、１周1,000ｍの中で、御神旗を奪い合う勇壮な演劇的ゲームです。福島県南相馬市太田神社、小高神社、相馬市中村神社に奉納されます。この地方は馬の産地であり、野生馬の訓練も兼ねているのです。

東北六魂祭には「福島わらじ祭り」が出し物でした。福島わらじまつり（８月３、４日）は２ｍの大わらじを土地の神社に奉納した後、音頭に合わせて踊る新しい祭りです。

東北にはこれらの祭りの他に東北ならではの土地の祭りが数多くあります。3.11後の今年の夏は各地で六魂祭に合わせるように東北十魂祭、百魂祭が熱く行われるにちがいありません。

## ２．東北連携・連合への東北首長たちのメッセージ

### ・東北全体を俯瞰した復興に向けて―東北日本海側４県知事からの提案

3.11大地震直後、平成23年５月31日、東北日本海側４知事（青森県、秋田県、山形県、

新潟県）は、被災地東北３県への復旧活動に動き、かつ、東北７県が共同体であるというメッセージを内外に表明し、国に対して提案を行いました。

「被災地の一日も早い復旧、復興を第一としつつも、一方で広域連携のもと、リダンダンシー機能を確保し、東北地方全体として、高いポテンシャルを最大限に活かして、期待される役割、機能を発揮し、日本の再生に貢献する」として、次の４つを提案しました。

提案１．太平洋側と日本海側の相互補完のための公共インフラの整備

提案２．エネルギーの確保、供給体制の整備

提案３．産業の振興、活性化

提案４．防災機能の強化

このうち太平洋側と日本海側の相互補完のための公共インフラの整備は現在、国も動き出しております。

**・3.11大震災に関する東北６県知事共同アピール**

７月12日、東北６県（青森、秋田、岩手、宮城、山形、福島）知事は、復旧、復興に向けた東北一体論をベースとした国に対する要望、共同アピールを出しました。

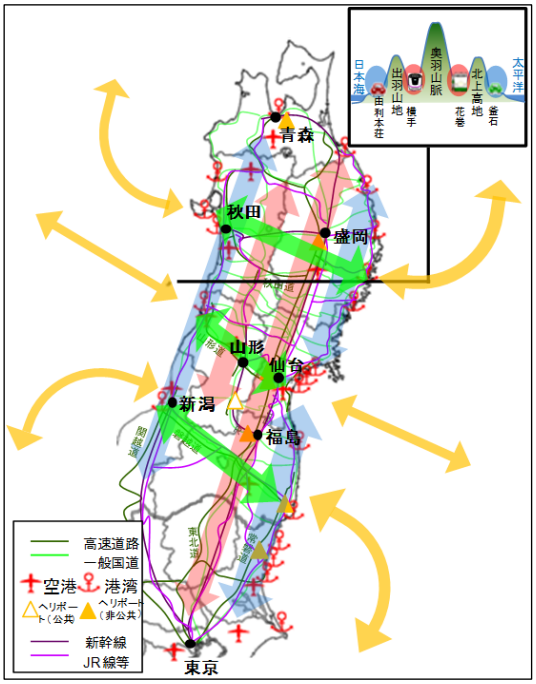
①原子力発電事故への対応について

国の責任において一刻も早く事態の収束を図るべきこと。避難者の生活の再建と東北地方の復興に向けた対策の実現を迅速に図るべきこと。

②東北地方の復興のための特区制度について

被災自治体の自主性を尊重し、自由度の高い特区制度をつくるべきこと。地方分権時代にふさわしい復興支援スキームをつくるべきこと。

**災害に強い広域交通基盤の効率的で効果的な整備等による代替性・多重性の確保が必要**




出典：国土交通省国土政策局総合計画課

③食糧基地、東北農業の復興について

被災地における農地、農業の復興に取り組みつつ、日本の食糧基地として、東北地方の農業の再生発展を図るべきこと。

④森林のめぐみを活かした復興について

～日本を代表する森林県秋田において開催された全国知事会を契機として～

福島原発事故を契機としてエネルギー政策の転換を求められる中、木質バイオマス資源をはじめとする再生可能エネルギー利用の促進。地球温暖化防止のためにも、森林、林業、木材産業関連の予算の充実を図ること。

⑤災害に強い国づくりのための高速道路網ミッシングリンクの解消について

～東北地方の真の復興をめざして～

東北地方が真の復興を果たすには、産業振興との推進と併せて、国土の骨格を成す、

太平洋側及び日本海側のそれぞれを南北に貫く「縦軸」と東西を結ぶ「横軸」の高速道路網の整備が極めて重要であること。

東北地方が一体となり、復興に向けて力強く進んでいくため、主要都市を広域的に結ぶ高速道路網の早期完成を図り、ミッシングリンク（不連続区間）を解消すべきこと。

3.11東日本大震災を契機とした東北各県の連携、連合への動きは、時代の流れとして「東北州」の創設の筋書きに乗ったものとも受け取れます。この春、道州制推進の首長会議が東京でありました。

**宮城県知事も参加した道州制推進知事、指定都市市長設立 設立趣意書（一部省略）**

平成24年４月20日

「現在、我が国は、人口減少・超高齢化社会の到来、グローバル化の進展など時代の潮流の中で、東日本大震災からの復旧・復興をはじめ、社会保障の維持と財政健全化の両立、円高・デフレの克服、国際競争力の向上と持続的な経済成長の実現など、困難な課題に直面しており、これらの課題に国全体で適切に対応していくためにも、有効性を失った中央集権体制を打破し、国と地方の双方の政府を再構築することで、地域主権型の“新しい国のかたち”を創造することが求められている。

これらへの回答が、明治期以来長きにわたってその構成と区域を維持してきた都道府県制を廃止し、より広い区域を単位とした広域自治体を設置する道州制の導入である。

道州制の導入により、指揮命令系統の一元化による迅速な意思決定の下、広域的な行政課題への総合的な対応が可能となり、また、広域自治体の機能強化を通じて、国は国家の存立に関わる事務に専念し、基礎自治体優先の原則を踏まえつつ内政に関する事務のほとんどを地方が担うことで、地方分権改革を飛躍的に推進することができる。」

道州制論者として、3.11東日本大震災の教訓を踏まえて、被災地東北においてこそ、道州制の先行モデル「東北州」を構想してみたいものです。

## ３．東北の歴史と「東北州」を見据えた未来論

3.11東日本大震災について、日本都市計画学会は、「東北の過去と未来-震災１周年の現在」（都市計画296、25.Apr.2012）を特集しています。これは東北支部（東北７県：青森、岩手、秋田、宮城、山形、福島、新潟）の会員諸氏の手になるもので、被災現場の復旧への取り組みを報告しつつ、3.11大震災を直視しながら「東北」とは何かを問い直した力強い報告書です。

「東北地方開発の歴史」奥村誠論文は、未来をも視野に入れた東北学の好テキストです。まず東北という地域概念は７世紀日本書紀頃からあること、11世紀奥州藤原氏時代、出羽と陸奥地域を指し、江戸時代に「奥羽」が一般的になったことを解説しています。地域概念としての「東北」は、廃藩置県の行われた明治初期に始まり、そして明治後期、東北は冷害などが続き、そのアピールと結びついて負のイメージを持ったこと、大正には奥羽地方は用いられなくなり、東北６県もしくは７県が地域概念として「東北地方」に定着した

のはこの時代からであることを辿っています。

明治以降の東北開発の要点は、廃藩置県、東京中央集権政府による統治というタテ型の国家統治構造構築のためのもの、東北は食糧、労働力の供給源であり、首都圏の重要な後背地であったこと、道路、鉄道、電力、電信、電話などの東北インフラ開発も、多分に東京を支えるためのものであったことをデータを示して解説しています。20世紀に入り日本が戦争へ傾斜してゆく時代、東北も産業報国運動の中に組み込まれてゆきます。

戦後の東北の復興については「東北地方の戦災復興10都市の概況」浅野純一郎論文、「東北の自然災害」については松富英夫論文が特集に掲載されています。

戦後の東北開発は敗戦の復興国土計画（1946）から、国土総合開発計画（1950）、全国総合開発計画（1962）、新全総（1969）、三全総（1976）、四全総（1987）、五全総（1998）、そして国土形成法（2008）の中に一定の位置づけがされてきました。

3.11の大震災直前につくられた、地方のことは地方の力で行うべしという主張をもった、「21世紀の国土のグランドデザイン」（平成8年）、「国土形成計画」（平成20年）、東北圏広域地方計画では、「国の役割がさらに減少し、道州制を見据えた地方分権の推進と新たな公と呼ばれるNPOなどの参画に期待を寄せる」時代になったと奥村論文は総括しています。

2011.3.11の原発事故を含む東北大震災という「現在」が東北あるいは日本の未来とどの様に繋がるのかはまさに被災地の復旧、復興の過程の中に、渦のように現れているのだと感じます。

東北をどの様にするのか、東北未来論についてはまさに東北につながりをもつひとびとの「価値」の再創造への意志が含まれるにちがいありません。

「東北州」はその一つの仮説であり、「東北州憲章」草案には、東北という大自然に営まれるべき生（死）とは何か、幸福とは何かが明記されることになるにちがいありません。

財団法人日本開発構想研究所は、40年の歴史を踏まえ、平成24年７月２日に「公益法人制度改革関連３法」に基づく、一般財団法人に移行しました。

私も理事長から代表理事に役職名が変わりましたが、研究所として、21世紀の日本のかたちづくくりに微力を尽くす所存です。どうぞ今後も引き続いてのご指導をお願い申し上げます。

【参考資料】


・「東北圏の概要」東北圏広域地方計画推進室　2008.1

・『東北力』　東北をこよなく愛する会　PHP　2011.8

・「【特集】東北の過去と未来―震災 1 周年の現在」『都市計画 296』

・「（特集）大震災後の国づくり、地域づくり　『UED レポート 2012 夏号』財団法人日本開発構想研究所 2012.6


(2012.07.15)

## 東北六魂祭

青森、盛岡、仙台、福島、秋田、山形の各市は毎夏、盛大な夏祭り、東北六大祭りが行われます。3.11 の犠牲者への鎮魂と被災地の復興を込めて、これを一堂に集めた東北六魂祭が、仙台市（第１回・平成 23 年 7 月）、盛岡市（第２回・平成 24 年 5 月）で行われました。来年、第３回は福島市で行われることが予定されています。

秋田竿燈まつり

青森ねぶた祭

山形花笠まつり

盛岡さんさ踊り

福島わらじまつり

仙台七夕まつり

## 東北圏の人口推移

| | 参考 | 震災前 | | 震災後 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 平成17年<br>10月1日 | 平成22年<br>10月1日 | 平成23年<br>3月1日 | 平成23年<br>10月1日 | 平成24年<br>4月1日 | 平成24年<br>5月1日 | 平成24年<br>6月1日 |
| 青森県 | 1,437 | 1,373 | 1,370 | 1,363 | 1,353 | 1,353 | 1,352 |
| 岩手県 | 1,385 | 1,330 | 1,327 | 1,314 | 1,305 | 1,305 | 1,305 |
| 宮城県 | 2,360 | 2,348 | 2,347 | 2,327 | 2,316 | 2,322 | 2,324 |
| 秋田県 | 1,146 | 1,086 | 1,082 | 1,075 | 1,067 | 1,066 | 1,066 |
| 山形県 | 1,216 | 1,169 | 1,166 | 1,161 | 1,155 | 1,154 | 1,154 |
| 福島県 | 2,091 | 2,029 | 2,024 | 1,990 | 1,970 | 1,968 | 1,967 |
| 新潟県 | 2,431 | 2,374 | 2,370 | 2,362 | 2,349 | 2,351 | 2,351 |
| 計 | 12,066 | 11,709 | 11,686 | 11,592 | 11,515 | 11,519 | 11,519 |

単位：千人

資料：住民基本台帳（平成17年・22年は国勢調査）

## 東北圏開発の歴史
## （近世～現代～未来）

| 時代区分 | 時代の流れ | 東北圏の人口規模 | 産業トピック | インフラトピック |
|---|---|---|---|---|
| 近世<br>（江戸） | 舟運の時代、港町の発展 | | 新田の開墾<br>水利技術 | 西廻り海運<br>東廻り海運 |
| 明治～大正 | 舟運から鉄道の時代へ<br>農業振興、工業等の勃興 | 757万人<br>（大正9年） | 大規模耕地開拓<br>殖産興業 | 鉄道の開通 |
| 昭和初期<br>（戦前～戦後） | 戦後復興に伴う食料、電源等の供給<br>大規模風水害をきっかけとする復興プロジェクト展開 | 1,066万人<br>（昭和20年） | 食料供給<br>電源開発 | 北上川特定地域総合開発計画（KVA） |
| 昭和37年<br>～昭和43年 | 高度経済成長、首都圏への人口流出<br>臨海部での工業集積（新産都） | 1,151万人<br>（昭和40年） | 臨海部工業への移行 | 臨海部整備（工業地盤、港湾等） |
| 昭和44年<br>～昭和51年 | 鉄道から自動車利用へ<br>大規模プロジェクトの展開 | 1,162万人<br>（昭和50年） | 重化学工業の振興<br>本格的な企業進出 | 東北縦貫自動車道整備 |
| 昭和52年<br>～昭和61年 | 高速交通時代の幕開け<br>急速な工業化 | 1,221万人<br>（昭和60年） | 臨海部から内陸部への産業立地 | 東北・上越新幹線開業 |
| 昭和62年<br>～平成9年 | 高速交通ネットによる行動圏の拡大<br>国際化の進展 | 1,221万人<br>（平成2年） | 産業の国際化 | 国際航路の整備<br>青函トンネル完成<br>横断軸の整備 |
| 平成10年<br>～平成23年 | 人口減少、少子高齢化社会の到来<br>地球規模でのグローバル化、環境問題等の進展、東アジアの経済成長 | 1,207万人<br>（平成17年） | 東アジア規模での産業連携 | ラダー型ネットワーク |
| 平成23年<br>（2011年） | 3.11東日本大震災 | 1,160万人<br>（平成23年） | くらしと産業の復旧・復興 | 新幹線・東北貫通、新青森まで |
| 平成32年<br>（2020年） | 脱原発、自然再生可能エネルギーへの転換 | 1,089万人<br>（平成32年） | 第6次産業、エコロジー型産業の促進 | 災害に強い広域交通基盤整備 |
| 平成42年<br>（2030年） | 地方分権、道州制・東北州への移行 | 985万人<br>（平成42年） | | |

※ 平成23年以降は戸沼が加筆